

---

# きみとあの日の理想郷

蒼弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きみとあの日の理想郷

### 【Nコード】

N4659P

### 【作者名】

蒼弥

### 【あらすじ】

あの日を境に、世界は変わってしまった。だけど俺たちは変わらなかった。馬鹿な事をして笑っていた。些細な事で不幸をなげいた。

それでも、変わってしまった世界の所為で、人生を変えられてしまった人もいた。それが不幸かなんて俺は知らない。ただ、笑顔が見たい。そう思ったんだ

総て終わったあとになれば、それこそ反省も後悔も数え切れない

くらいしたけれど。それでも、あの子と出会ったことだけは、一度足りとも後悔せずにいられたから。

だから俺は、この物語を話すことにしよう。包み隠さず、一切の虚偽も修飾も無く、ただありのままに。

この物語が　俺たちの結末が、未来永劫に幸福であるために。

これから俺が語るのは、変わってしまった世界を綴る物語。

俺と彼女と、一人の小さな泣き虫の物語だ。

## 第零話：悪魔

じゃらじゃら。じゃらじゃら。

鎖の音が鳴り響く。

「へえ、コイツが例の？悪魔？か？ オレにやあただのクソガキにしか見えねえが」

冷たい地下牢。石床の感触。侮蔑の眼差し。

「こんななりだが、コイツは確かに悪魔だよ。くそ忌ま忌ましいことにな」

この身を繋ぐ鎖すらも、何処か遠い出来事と感じてしまう。

「おいおいアンタ、自分のおかれてる状況わかってんのか？ オレ達はその気になりゃあ、アンタなんかすぐにでも殺せんだけ？」

恐れも怯えも示さないわたしが気に入らないのだろう。先ほどこらべらべらと話しをしている男がわたしの前にしゃがみ込み、その右手に持った短剣を頸くびに添わす。全身を鎖で幾重にも繋がれている私を前に、自らの優位を確信する男の表情かおがどこか滑稽で、思わずくすりと笑ってしまった。男の表情が険しくなり、怒りで顔に朱が差す。

「テメエ……今すぐ殺してやるつか」

「おい、近くに寄りすぎだ！」

ああ……もう遅い。

「ハッ、いくら？悪魔？つつたつて、所詮はごと

頸元の短剣で右手の鎖を断ち切る。そのまま自由になった右手で短剣を掴み、目の前の男の首を刎ね、その勢いのままに身体を繋ぐ鎖を全て断つ。

『あなたのその？チカラ？はね、神様からの贈り物ギフトなのよ』

？チカラ？を使う時、何時も聞こえて来る言葉。

それは誰の言葉だったのか。今はもう、それすらも思い出せない。それはとても、とても大切なモノだったはずなのに。

「う、うわああアアアア！」

うるさい。

大声で叫ぶ男の首に、左手首に残る鎖を巻き付けてから引き、喉を潰して黙らせ、そのまま首をへし折る。息絶えたのも確かめないまま、地下牢を見渡し、人数と配置を確認。短剣を逆手に持ち、出入口に一番近い男へと詰め寄る。

「来るな来るな来るな来るなアア！」

大きく横に振られた腕をしゃがみ込むように避け、懐へと入り込む。

『その？チカラ？は、神様からの贈り物。だから使うときは、自分のためだけじゃなくて、誰かのために使いなさい』

突進する勢いをそのままに、胸へと短剣を一突き。すぐに横にし

ていた刃を捻りながら抜き、後ろから来た横薙ぎの攻撃を上に乗びながら避け、空中で逆さになりながらも首に短剣を振るう。

『あなたは優しい娘だから、いつかきつと、その？チカラ？に悩むときが来ると思うの』

出入口を背に、短剣を構える。その頃には男たちも冷静になつたらしく、各々武器を構え、殺意の籠った視線でわたしを見つめる。

『でも大丈夫。あなたは強い娘だから、神様だって、天国から見守って下さるわ』

あの人は、強くて優しい人だった。

あの人のことは忘れてしまっても、わたしはそれを覚えている。

「……ははっ」

思わず笑いがこぼれる。

「あは、ハハハハッ！」

「……いきなり笑い出しやがった。アイツは何考えてんだ？」

「悪魔の考える事何ぞ知るか」

「気イでも狂ってんだらうよ」

男たちがわたしのことを話してるみたいだけど、そんなことを全く気にならなかつた。そんなことよりも、ただこの衝動に身を任せ、思う存分に笑っていたかった。

楽しいのではなく。

嬉しいのでもなく。

ただただ、可笑しかった。

「ガンズ、お前は左からだ。ゲイルは右、ジーは後方支援。俺は正面から行く。全員合図で合わせろ」

「了解」

「ケツ、割に合わない仕事だよ」

「まったくだ。俺はもう、帰って寝たい」

「おりゃあ、女房の飯でも食いてえな」

「独り身の俺に対する嫌みか？」

「ばーか、惚気だ」

「ゲイル、ジー、無駄口を叩くな。」

来るぞ」

神様なんていない。

あの人は優しい人だったから、そのことを知らずにいられた。信じたままでいられた。

「クソツ、来やがったツ！」

「散開しろ！一カ所に留まるな！」

神様なんていない。

だからこの？チカラ？は、神様の贈り物なんかじゃない。

「がっ」

「ジー！　　かはっ！」

「くそがッ！　　悪魔が何だっただッ！」

此処は地獄だ。地獄には、悪魔の方がお似合いだ。

彼らの言う通り。これはきつと、悪魔の？チカラ？。

だから、　　わたしは？悪魔？だ。

「アアアアアアアアアア！！」  
「これでも喰らいやがれッ！！」

振り下ろされる長剣を、持っていた男の死体で受け止める。食い込んで抜けなくなった長剣を死体ごと弾き飛ばし、がら空きとなった脇腹に、順手に持った短剣を突き刺す。

「……あなた、泣いてんのかよ。悪魔のくせに……」  
『泣かないで。すぐに帰ってくるわ』

うるさい……！！

突き刺した短剣を手首まで挿込んだら、腹を切り裂いて内臓を引きずり出す。言葉を聞きたくなくて、声の出せぬように、喉を切り裂いて息の根を止めた。

その場にいた全員が死んだことを確認した後、血糊で汚れて斬れなくなった短剣を投げ捨て、返り血もそのままに出口へと向かう。石造りの階段を少し上り、連れられた時の記憶を頼りに廊下を歩く。下で騒いだにも関わらず、人とすれ違うことはなかった。他に人がいないのかもしれない。

粗く木で作られた扉を両手で開く。よろめきながらも覚束ない足取りで外へと出る。

一三歩歩いてから、頬を濡らす感触に気付く。

「……ゆき」

空を見上げる。

雲一つない、綺麗な空。

冬の淡く優しい光も、今の私にはまぶしくて。でも、目を逸らす

ことだけはしたくなくて。

ただただ、積もることなく降っている淡雪を見つめていた。

「かえらなきや……」

言葉はただ、舞い落ちる雪とともに、冬の空へと融けていった。

## 第零話：悪魔（後書き）

受験のストレスでやった。正直反省も後悔もしている。

不定期というか亀更新というか忘れた頃にやって来るといっつか、つまりはそんな更新ペースでやっていきます。遅筆に定評のある作者。

あ、感想とか批評とか誤字訂正とか作者への愛の告白とか、首を長くしてぐねぐねうごめきながら待っていますんで！ まあ嘘ですが。さすがにそこまで変態じゃあないです。はい。

罵倒でも良いですよ。作者は基本Sですけど、M的な何かも有したりしています。残念でしたね皆さん！

ではまた次話でお会いしましょう！ しーゆーあげーん！！

……………やっべ。初っ端からトバし過ぎたわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4659p/>

---

きみとあの日の理想郷

2011年10月6日09時44分発行